

ふるさと見て歩き

第109回

素鷲神社と祇園祭

本市の大宮地域で行われている祇園祭。

以前は4日間で行われていた祭事ですが、3日間への短縮、自動車交通量増加による一時中断を経て、現在は7月下旬の2日間に簡略化され、行われています。

祇園祭は甲神社周辺で行われるため、甲神社の祭事と認識されている方もいるかもしれませんが、正確には甲神社境内にある摂社 素鷲神社の祭事です。

社伝によると、素鷲神社は征夷大將軍坂上田村麻呂が東北に遠征する途上に立ち寄った際に、子ども達が神像らしきものを担いで騒いでいるのを見て、その神像を「靈驗あらたかなもの」として祀ったのがはじまりとされています。



▲素鷲神社

この素鷲神社は、昔からずっと現在地にあったわけではなく、もともとは大宮地域姥賀地区の天王※にあったとされています。

※天王

118号旧道とバイパスの交差点の東側一帯の地域を指す。素鷲神社があったとされる場所には現在第十区公民館があり、地元の有志による石碑が建てられている。かつては祇園祭の神輿がここまで渡御した。



▲素鷲神社があったとされる第十区公民館に建てられた石碑

それがどうして天王から現在地に遷されたのでしょうか。答えは、江戸時代の元禄年間（1688～1704年）に水戸藩によって行われた、一村一社制にあります。この制度によって甲神社が部垂村※一村の鎮守となり、素鷲神社は甲神社の摂社として現在地に遷されたと伝わっています（一説には現在地に遷座する前に上町を経由したともいわれています）。

※部垂村・・・大宮村の旧称。天保14年（1843）に大宮村に改名。

さて、ここで出てきた天王という地名に、聞き覚えのある方もいると思います。現在の姥賀地区に地名が残る「天王」は、牛頭天王を指しています。

牛頭天王は、インドの祇園精舎の守護神とも、新羅の牛頭山の神ともいわれる諸説ある神様で、日本では神仏習合により、素戔鳴尊と同一視されていました。その牛頭天王は、もともと人々に疫病をもたらす疫神とされていましたが、祀れば逆に疫病やその他の災厄から護ってくれと考えられていました。そのため医学の乏しい時代では、疫病への対抗手段として牛頭天王を祀り、特に疫病の流行しやすい時期である7月（旧暦6月）に祭事を行い、疫病退散・無病息災を祈願してきたのです。

そしてそれは、現在行われている祇園祭でも変わりません。込められた願いを意識することで、祇園祭の違った一面が見えるかもしれません。



▲現在の祇園祭の様子

参考文献

大宮町史編さん委員会「大宮町史」1977、大宮町歴史民俗資料館「大宮町の年中行事」2000、大宮郷土研究会「大宮の地名」2010、株式会社吉川弘文館「年中行事大辞典」2009

歴史文化振興室 ☎52-1450